

2025年10月12日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教56「羊を守る門」
 詩編100:1~5、ヨハネ10:7~10

イエスさまは、繰り返しご自身を「門」と表現されます（7、9節）。この門は、前のところで羊に入る囲いが出てきますが、何よりもその囲いに入る門と理解することができます。この囲いは、夜、羊たちが休むところです。朝になると羊飼いは羊たちを囲いから出して牧草や水のあるところへ連れていきます。そして夕方になると囲いがあるの中に入れる。これが羊飼いと羊の日常でありました。でもそれは羊飼いがいて、そして囲いがあることで成り立つ日常であります。ある意味、それらに守られている。これがなかったら羊は全く無防備であり、多くの危険に晒されることになります。

羊の話はよく説教で取り上げますが、やはり羊は弱い動物の象徴です。この後に狼が出てきますが、肉食の狼に食べられてしまう。また福音書には迷い出た一匹の羊の話がありますがとても迷いやすい。イザヤ書には「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った」（53:6）とあります。それぞれの方角に、自分の思う方向に向かって行く。羊の迷いやすさは、目が悪いこともあるでしょうけれども、これは羊の性格でもあると思います。素直に言うことを聞かない。頑固なところがあるのかもしれません。弱い上に頑固というのは手に負えないと思いますが、それが外でもないわたしたちのありのままの姿なのです。

加えて、今日のところには盜人、強盗が出てきます。「わたしより前に来た者は皆、盜人であり、強盗である」（8節）「盜人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにはかならない」（10節）「盜人」と「強盗」とは原文でも言葉が違うのですが、ほとんど同じような意味と捉えてよいでしょう。「強盗」はあの良きサマリア人の話で「追いはぎ」と訳された言葉です。集団で襲うようなものかもしれません。何にしても、その目的はここにあるように「盗んだり、屠ったり、滅ぼしたり」と羊にとっての脅威になります。

ここでイエスさまは「わたしより前に来た者は皆、盜人であり、強盗である」と言われます。イエスさまより前に来たというのは、ファリサイ派や律法学者などのユダヤ教の指導者を指しているのかもしれません。イスラエルの人々に神さまの言葉を語り、救いに導いて来た指導者たちです。しかし彼らは神の民である羊を養うのではなく、むしろ羊を奪い、搾取し、私腹を肥やすようなことをしてきた。わたしたちはすぐ統一協会のようなものが頭に浮かぶかもしれません、でもそういう誘惑はどこか遠い話ではなく、わたしたちの身近にあるのです。

先月、「教会に仕える」という主題で教会修養会をしました。仕えるというと奉仕をすることをイメージするかもしれません。もちろん教会のために何かをすることは大事ですが、その根底にあるものは愛です。神さまから愛されている。その愛に応えて神さまを愛する。教会を愛する。そしてその愛は他者への配慮という形になって現れてきます。誰かを心配したり、気遣ったり、そのようにしてわたしたちは教会に仕えます。ところがイエスさまを見失い、共に生きる他者を見失ってしまう時に、わたしたちは教会に仕えることができなくなります。自分が主人になって教会に仕えてもらいたいと思うようになる。いつの間にか教会が自分の思いを通して自己実現の場所になる。牧師や一部の人たちの自分勝手な思いに振り回されるようなことがあります。みんなバラバラでそれぞれの方角に向かっているのです。そのようにして教会は壊れ

ていきます。そういう例は枚挙にいとまがありませんが、よほど警戒していないと誰でも盗人になって群れを荒らすということが起こります。イエスさまが頭でなくなり、ただ人間の思いが支配してしまう。自分にとって居心地のよい場所、自分の思いが通る場所、それだけになってしまいます。それは不幸なことです。それもまた羊の弱さゆえであります。

今日の御言葉は、1934年ドイツの教会で作られた「バルメン宣言」という信仰告白の拠り所となった御言葉であることがある本に書かれておりました。「バルメン宣言」は正式には「ドイツ福音主義教会の今日の状況に対する神学的宣言」と言いますが、この告白が生み出された状況はドイツがヒトラーの政権下にある時で、このヒトラーの影響を受けた「ドイツ的キリスト者」と呼ばれる人たちとそれに抵抗するドイツ福音主義教会との対立の中で生み出されたものです。この対立を「ドイツ教会闘争」と言います。ヒトラー政権下のもと、一元化、全体主義化が徹底され、教会もその影響を受けました。「バルメン宣言」の第一項はこうです。

「聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聴くべき、また、われわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の言葉である。教会がその宣教の源として、神のこの唯一の御言葉の他に、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならないという誤った教えを、われわれは退ける」ここにはナチスとかヒトラーという固有名詞は出てきませんが、この告白文がナチスの支配に屈しないで抵抗する力となりました。これはイエスさま以外にわたしたちが信頼し服従するものは何もないという宣言です。

そして、その根拠となる御言葉が「わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる」（9節）なのです。イエスさまだけが救いに至る門であり、それ以外に救いへの入り口はないのです。ヒトラーは救いの入り口にはなり得ません。むしろ盗人、強盗であり、羊を盗み、屠り、滅ぼしました。それは第二次世界大戦のあの悲惨な歴史が物語っているでしょう。わたしたちはただイエスさまという門を入ってわたしたちは救われます。そしてそこには豊かな命が約束されています。ナチスは死をもたらしましたが、イエスさまは命をもたらします。「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」（10節）

その命とは、イエスさまが十字架で自ら献げてくださった命です。「羊が命を受けるため」イエスさまは十字架で死んでくださいました。わたしたちを弱さ、罪を十字架で贖い、そして三日目によみがえってくださいました。その命でわたしたちを養ってくださいます。「しかも豊かに受けるため」（10節）この言葉には「有り余るほど」という意味があります。自分を超えてその命が周囲に及んで行くでしょう。それは他者を愛する命です。わたしたちはもはや盗む者ではなく、与える者、イエスさまの命を分かち合う生き方へ導かれます。

天の父よ。羊のように弱く、それでいて頑固なわたしたちです。けれどもあなたはそのようなわたしたちを忍耐し、救いへと導いてくださいます。そのために独り子イエスさまをくださりイエスさまを通して救いの中へ、神の国へと招き入れてくださいます。この恵みを覚えてあなたに従う新しい歩みを与えてください。主の御名によって祈ります。アーメン。